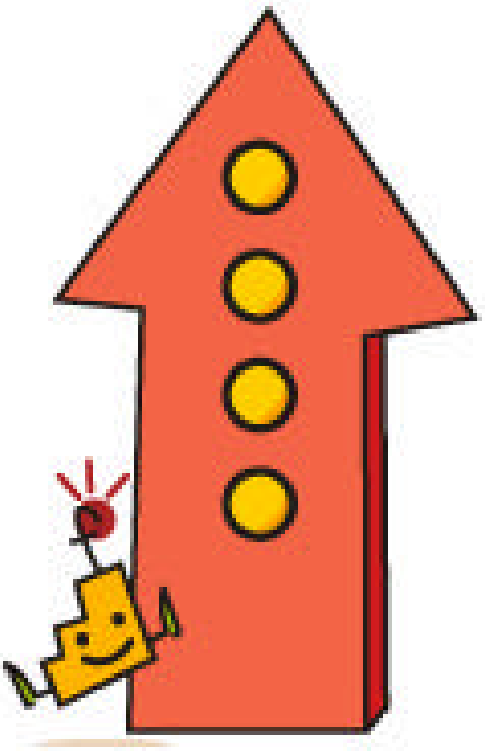
第 2 回（2006 年度）

学生チャレンジプロジェクト報告書



福 岡 大 学　学 生 部

（平成 19 年 6 月発行）

目　　次

第 2 回「学生チャレンジプロジェクト」を振り返って

学生部長　中　原　　一

〈採択プロジェクト〉

アジアの発展途上国における環境問題と観光政策に関する調査研究
－　ネパールをモデルケースとして　－

ポウデル・サントシュ　・・・　1

「和(なごみ)」前にカフェをデザインしよう

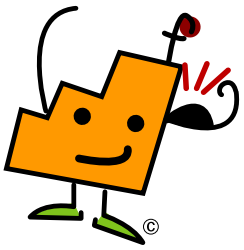
井口　かおり　・・・　9

外国人留学生のための学生ツアーコンダクター実施予備調査

中島　隆弘　・・・　13

コミュニティ活性化のための地域通貨実現に向けた調査研究

長谷川宗典　・・・　19



第 2 回「学生チャレンジプロジェクト」を振り返って

学生部長　　中原　一

福岡大学「学生チャレンジプロジェクト」は、本学の創立 75 周年（2009 年）を記念して企画されました。学生の皆さんが自主的で自由な発想から企画した独自のプロジェクトを本学が資金面等で支援するもので、初年度の 2005 年度は 23 件の応募のうち 4 件が採択されました。第 2 回目の 2006 年度は、残念ながら前年度よりも応募が減少し、11 件の応募件数となりましたが、キャンパスライフ、環境問題、福祉、文化・学術的なものなど創造力に富んだプロジェクトでした。

選考にあたっては、ヒアリングを実施のうえ、①独自性、②実現性、③熱意・積極性、④社会貢献度等の視点から総合的に判断し、4 件のプロジェクトが採択されました。

約半年間のプロジェクト実施期間を経て、皆さんの夢が具体的なかたちに変わっていく過程とその成果について報告会を行いました。当初の計画どおりに活動することができず、目的達成の充実感を味わうことができなかったチームもありますが、何よりもチャレンジ精神を持って精一杯努力したことに拍手を惜しみません。予期せぬ台風の接近にあわてて対応したチーム、各方面の協力のもとシンポジウムを開催することができたチームなどありましたが、このチャレンジプロジェクトで得たものを糧に、これからも挑戦し続けてください。

「学生チャレンジプロジェクト」は、2006 年度から「福岡大学ステップアッププログラム」の一つに位置付けられました。「豊かな人間性」へのステップアップを目標に、今後も数多くの学生がこのプロジェクトに応募をしてくれることを期待しています。

アジアの発展途上国における環境問題と観光政策に関する調査研究
～ネパールをモデルケースとして～

福岡大学経済学部産業経済学科
ポウデル・サントシュ

1. プロジェクトのねらいと目的

1.1. プロジェクトの背景

アジアには、アジア特有で世界に誇る観光資源を有する国が数多くあります。例えば、私の母国であるネパールは、図 1.1 のように、インドの北に位置し、世界に誇るエベレストや絶滅危惧種が生息するタライ平原で有名なロイヤル･チトワン国立公園などの環境観光資源があります。

図 1. 1　ネパールの位置

ネパールの首都であるカトマンズ市は、「カトマンズの渓谷」として世界遺産に登録されている有名な都市です。現在のカトマンズ市には、昔の王宮があるダルバール広場を中心として中世の建築物を残した旧市街地と、それを取り巻くように広がった、オフィスやショッピングセンターなどが立ち並ぶ新市街地とが混在しており、面白い都市構造となっています。

図 1.2　ネパール・カトマンズ市

しかし、その一方で、カトマンズ市の環境汚染についても問題となっています[1]。国際総合山岳開発センター（ICIMOD）が策定した報告書『The Katmandu Valley Environment Outlook』によると、「経済成長と人口増加に伴う環境悪化に有効な対策を講じない限り、カトマンズの成長は深刻な打撃を受ける恐れがある。」との指摘があり、特に、廃棄物処理と排水処理の 2 つは、最も深刻な環境問題として挙げらています[2]。

これらの問題の原因の一つとして、ネパール・カトマンズ市住民の環境に対する意識が非常に低いことが挙げられます。

私は、ネパールが有している環境観光資源を保全･維持し、世界に類をみない自然を世界に提供することで、世界各地から多くの観光客が訪れ、ひいては、ネパール経済が活性化されると考えます。しかしながら、ネパールの住民には、これらの環境観光資源の保全がもたらす経済価値を理解し、それらを守ろうとする意識が低いように思われます。

たとえば、カトマンズ市を流れるバグマティ川は、住民によるゴミなどの投棄が原因となって、図 1.3 のように水質汚濁が深刻化しています。

図 1.3　バグマティ川の現状

ネパールへの旅行客は、必ず、首都であるカトマンズ市を立ち寄ります。自然遺産の観光を楽しみに訪れた観光客が、最初の訪問地で環境汚染が進んでいる光景をみて、またネパールを訪れたいと思うでしょうか？

1.2.　本プロジェクトのねらいと目的

本プロジェクトは、ネパールの環境問題を研究課題として取り上げ、ネパールの観光政策に資する環境問題解決策を提案し、新しいアジア立国環境問題解決策のモデルケースをアジア世界へ発信することがねらいとして、活動してきました。本プロジェクトの具体的な活動目標は、次の通りです。

① バグマティ川の汚染の原因と考えられる住民のゴミ廃棄行動を調べ、ゴミ廃棄行動とバグマティ川の汚染状況との因果関係やその影響を調べる。
② 福岡やネパールで環境保全にかかわっている市民や留学生との研究報告会を開催する。
③ 研究報告会では、①の研究課題を議論のテーマに、環境と観光の共存について議論する。

2.　実施内容

2.1.　実施計画

本プロジェクトは、図 2.1 で示しているように、大きく 4 つの段階に分けて活動を進めるように計画しました。

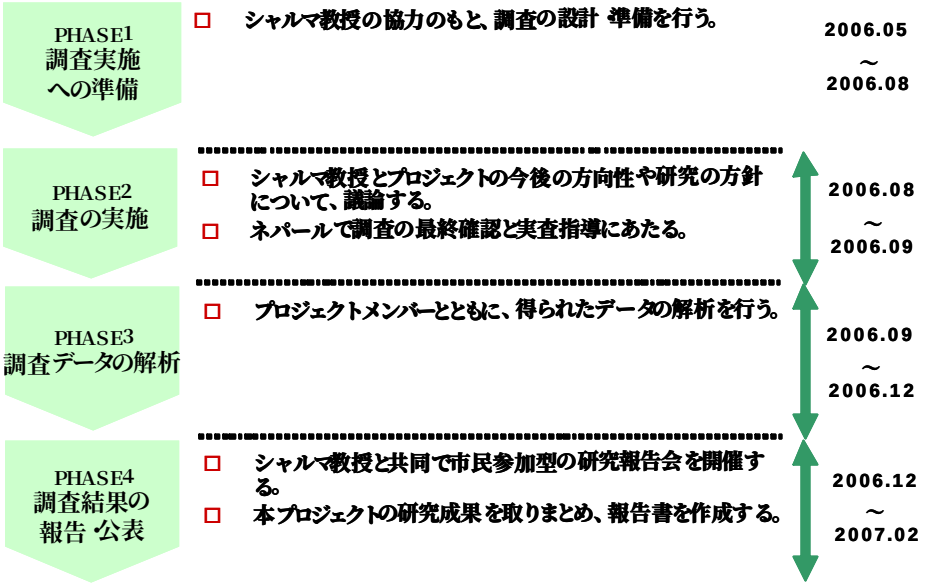


図 2.1　プロジェクトのスケジュール

PHASE1　調査の準備期間：6 月～8 月

カトマンズ大学のシャガル･シャルマ教授の協力を得て、カトマンズ･バグマティ川でのゴミ廃棄行動と汚染状況の関係性を調べる調査の設計と準備を行う。

① シャガル･シャルマ教授と調査票作成、調査の設計(どこで調査をするか、サンプル数の設定など)の議論を行う。

② シャガル･シャルマ教授が指導する現地大学生に、調査表の作成、印刷、調査の実施などをすすめてもらう。

ここで、シャガル・シャルマ先生についてご紹介します。シャガル先生は、福岡大学大学院商学研究科に進学し、福岡大学商学研究科課程博士第 1 号を取得しました。シャガル先生とは、私が 4 年前、福岡の日本語学校に在学していたときに知り合いました。日本語学校卒業後に進学する大学を検討していた際に、シャガル先生から福岡大学に進学することを勧めていただきました。2002 年に、私は福岡大学に入学したのですが、当時は、日本語を上手に話すことができず、また、大学内での友達も少なかったので、大学での生活は、正直辛いことばかりでした。その時、私の大学生活に勇気づけてくれたのは、シャガル先生でした。

このようなご縁もあり、今回、シャガル先生には、私たちのプロジェクトの共同研究者として現地での調査実施に協力していただきました。

PHASE2　調査の実施期間：8 月～9 月

福岡大学のプロジェクトメンバーを代表して私が、ネパールを訪れ、調査の最終確認と実査の指導にあたる。また、シャガル先生とプロジェクトの今後の方向性や研究の方針について、議論した。

PHASE3　調査データの解析期間：9 月～11 月

現地大学生の協力を得て、調査票のデータ入力をネパールで行い、調査票とデータを持って帰国する。

福岡大学のプロジェクトメンバーと、バグマティ川の環境汚染とゴミ廃棄行動との関係について分析を行う。

PHASE4　調査結果の報告･公表期間：12 月～2 月

プロジェクトに協力していただくシャガル先生に来日していただき、共同で研究成果報告会を開催する。報告会は、市民参加型とし、ネパールとのかかわりが深い、国連ハビタットの関係者や留学生の方々と、調査結果の議論や環境保全政策や観光政策について議論する。最終的に、本プロジェクトの研究成果を取りまとめ、報告書を作成する。

2.2.　ネパールでの調査実施

学生チャレンジプロジェクトへの採択が決まり、ネパールで調査を実施するために、その準備を行いました。はじめての取り組みのため、どのような調査を企画すればよいのか、どのようにしてネパールで調査を実施すればよいのか、など様々な問題に直面し、メンバーと議論、検討しました。その際、本プロジェクトを進行するに当たって、福岡大学経済学部の斎藤参郎先生、福岡大学工学部の松藤康司先生からとても有意義なコメントやアドバイスを頂きました。また、ネパールでの調査を実施する際に、シャガル先生の協力は、大変助かりました。

2006 年 8 月に、私は、ネパール・カトマンズ市を訪れ、ネパールでのフィールドワークを実施しました。

ネパールでは、シャガル先生、カトマンズ大学の学生 5 人と共同で、フィールドワークを行いました。具体的には、調査票の作成等の調査デザインの議論、実際に、カトマンズ市内へ出て、居住者へのインタビューを実施し、カトマンズ市内を流れるバグマティ川の水質調査などを行いました。

最終的には、以下の 3 つの調査を実施することができました。

1. バグマティ川の水質調査
2. バグマティ川周辺住民に対するゴミ廃棄行動実態調査
3. ネパールへの観光客に対する観光行動調査

図 2.2　ネパール・カトマンズ市での調査実施

私は、2 年ぶりにネパールに帰国したのですが、一番に感じたことは、ネパールの環境の汚染具合が、以前にも増して、ひどくなっているということです。実際に、ネパールへ訪れた観光客にインタビューする機会がありました。そのとき話した内容のなかに、彼らのカトマンズ市での生活について気になることは、飲料水などの生活用水の汚れ具合についてでした。ネパールの水道事情について説明すると、上下水道はあまり整備されておらず、カトマンズ市民の生活用水の主な水源は、市内を流れる河川です。それゆえ、カトマンズ市の生活用水の水質は、市内を流れる河川の汚染具合に依存しています。

しかし、そんな現状にもかかわらず、市内の居住者にインタビューしてみると、彼らは、自分達のまちの環境汚染が進行している実感はあるものの、このような問題は政府や行政が取り込むことであって自分には関係ない、という回答を受けることが多く、彼らから、自分自身で率先してなにかやっていこうと意識が感じられないように思えます。　今回のネパールでの調査は､現在のネパール･カトマンズ市の環境汚染の現状を確認することだけでなく、私自身の郷土愛も再確認できた貴重な機会でした。

2.3.　シンポジウムの開催

私がネパールから帰ってきてからは、プロジェクトメンバーとともに収集してきたデータの分析を行いました。

そして、その結果を、2007 年 2 月 15 日、よみうりホール（福岡市中央区赤坂）で、一般市民向けのシンポジウムで報告しました。

シンポジウムでは、ネパールでお世話になったシャガル・シャルマ先生に来福していただき、シャガル先生を交えて、研究成果の報告や、今後のネパールの環境問題への取り組み方などについて議論しました。また、山下宏幸学長をはじめ、多くの方々にご参加いただきました。

研究報告では、以下の 4 つの発表を行いました。

(1)「Saving Bagmati River : Challenges and Opportunities」
Sagar Raj Sharma

本報告では、シャガル先生より、ネパール・カトマンズ市の概要や、市内を流れるバグマティ川の概要について説明がなされました。バグマティ川の歴史やいつごろから、バグマティ川の汚染が進んでいるのかなど、カトマンズ市民の視点に立った見解が述べられました。

(2)「GIS を活用したネパール・カトマンズ市のゴミ廃棄行動地区特性」

小峠勇大朗，國分優太，山際孝浩，ポウデル･サントシュ

本報告では、ArcGIS や google earth といった GIS（地理情報システム）ソフトウェアを用いて、カトマンズ市で行った調査の対象となった 4 地区（Boudha 地区、Tilganga 地区、Baneshwor,地区、Thapatali 地区）の住民のゴミ廃棄行動の特性を明らかにしました。具体的には、各地区で、どんな属性の人々が住んでいるのか、また、彼らはどれぐらいのゴミを排出しているのか、どのような処理を行っているのか、などに着目して分析を行いました。

(3)「支払い意思額に着目したネパール住民の環境改善の意識計測」

ポウデル･サントシュ，高木健

本報告では、ネパール・カトマンズ市民が、ネパールの環境改善のために支払ってもよいと考えている、環境改善のための支払い意思額の考え方にもとづいて、カトマンズ市の環境保全やバグマティ川の水質保全に対して、どれだけの意識をもっているか、について定量的に計測しました。また、共分散構造分析により、カトマンズ市民の日常の消費行動と支払い意思額の因果関係について検証しました。

(4)「ゴミ廃棄行動と水質汚染の因果モデルによるバグマティ川の環境計測」

重富三郎，倉富貴志，松延勢二，ポウデル･サントシュ

本報告では、数年後のバグマティ川流域の水質汚濁を予測するモデルを構築しました。具体的には、バグマティ川流域から計測した COD（Chemical Oxygen Demand）の値とバグマティ川流域住民のゴミ排出行動との因果関係を推定し、推定されたパラメータをもとに、5 年後のバグマティ川の水質汚濁の状況を予測しました。

また、研究報告後には、下記のメンバーの方々と私を含めた 6 人でネパールの環境問題について、パネルディスカッションを行いました。

斎藤参郎先生（福岡大学都市空間情報行動研究所･所長，福岡大学経済学部･教授）
境道啓氏（福岡市環境局施設部中部中継所･所長)
シャガル･シャルマ先生（カトマンズ大学･助教授）
松藤康司先生（福岡大学工学部･教授）
中嶋貴昭先生（福岡大学都市空間情報研究所・ポストドクター）

パネルディスカッションでは、パネリストの方々がそれぞれの立場から、今回、報告した内容にコメントを行いながら、ネパールの環境改善に向けての方向性や、福岡大学、カトマンズ大学、そして福岡市が果たすべき役割について議論がなされました。

そのなかで、境氏より、50 万円という限られた予算のなかで、ここまでやり遂げたことがすばらしい、とのお褒めの言葉を頂き、大変、うれしかったことを覚えています。

今回、プロジェクトメンバー一同、このようなイベントを企画したことが初めての経験であり、不十分な点もありました。しかし、全体を通してみれば、活発な議論もなされ、山下学長をはじめ、多くの方々からお褒めの言葉も頂いたことから、この企画は成功したと確信しております。

図 2.3　研究報告シンポジウムの実施

3.　本プロジェクトのまとめ

本プロジェクトでは、私が福岡大学経済学部産業経済学科で学んでいる調査･解析のノウハウを用いて、ネパールという発展途上国の環境への新たな政策を提言するという目的を掲げ、実施してきました。これは、私にとって、大変有意義な経験となりました。特に、ネパールでの調査で、現地の学生との交流が行えたことは、よい思い出です。

このプロジェクトを進めていくなかで、1 番嬉しかったことは、一緒にフィールドワークを行ったカトマンズ大学の学生の言葉です。ネパールの市民に対して、自身のまちの環境に対する意識などをインタビューした後、彼らは、改めて、ネパールの深刻な環境問題に目を向けてくれたのです。ネパール滞在の最終日に、これまでのフィールドワークとこれからの研究の方針について議論する機会がありましたが、彼らから「ネパールの環境改善に向けての取り組みについて、私達はよりいっそう、環境問題に関心をもち、活動していきます。」と言ってくれたことに、私はとても感動し、ネパールでのフィールドワークに対して、大きな達成感を得ました。

本プロジェクトは、学生の企画した小さな取組みなのかもしれませんが、数多くの人を接し、ネパールの環境について少しずつ意見交換しあう中で、大学間や官と学、そして、日本とネパールといった、大きな交流が生まれたと感じました。

どんな小さな取り組みでも、個々の人の環境に対する意識改善や取組みが、やがて大きな渦となって、発展途上国の多くの住民が環境への意識を高めていくきっかけになるのでは、そして、将来的の環境問題の解決につながるのではないか、と実感しています。

最後に、本プロジェクトを遂行することができたのは、私 1 人の力によるものではありません。私を支えてくれた数多くの方々のご指導やご助言によるものであります。

私のゼミの指導教官である、福岡大学経済学部の斎藤参郎教授（福岡大学都市空間情報行動研究所･所長）には､本プロジェクトの発足当時から､手厚いご指導とご高配を賜りました。いかにして、プロジェクトを遂行していくか、といったノウハウだけでなく、研究に対する真摯なまでの取り組み方など、多くのものを学びました。

福岡大学工学部の松藤康司教授、福岡市環境局施設部の境道啓所長には、環境問題に関する知識がない私に、親切丁寧なアドバイスをしていただきました。

ネパールでのフィールドワークについては、カトマンズ大学のシャガル・シャルマ先生、そして、本プロジェクトに協力してくれた学生の Junu Shrestha さん、Kiran Maharjhan 君、Ranjana Pajiyar さん、Rashmi Dhungel さん、Susil Tuladhar 君の活発的な活動により、ネパールでの貴重なデータを収集することができました。

そして、私の志に賛同し、本プロジェクトに参加してくれ、幾日もの夜を徹した作業や議論をともに行ったプロジェクトメンバーの、池松真奈さん、重富三郎君、小峠勇大朗君、倉富貴志君、山際孝浩君、國分優太君、高木健君には深く感謝いたします。

このほかにも、私のゼミの仲間や友人、知人など数多くの方々に支えて頂きました。この場をお借りし、皆様に心より御礼申し上げます。

参考文献

[1] 『地球の歩き方　ネパール　2005～2006 年版』，ダイヤモンド社，2005

[2] International Centre for Integrated Mountain Development (ICIMOD), Ministry of Environment, Science and Technology (MoEST) and United Nations Environment Programme (UNEP) ed.，*The Kathmandu Valley Environment Outlook. Kathmandu*, Nepal: International Centre for Integrated Mountain Development (ICIMOD), 2007

「和(なごみ)」前にカフェをデザインしよう

代表者氏名：井口かおり

本プロジェクトの目的は、工学部「和(なごみ)」前の空き地を有効活用し、学生が気持ちよく過ごせるような憩いの空間を提案することである。文系エリアに比べ、工学部周辺は憩いの場が少ない。そして工学部五号館前には多くの学生がたむろしており、通行人の邪魔になっているという問題があった。私たちはその問題を解決すべく、工学部の和(なごみ)前の空き地に憩いの空間が提案できないかと考えた。売店和(なごみ)前には、広場が設置されているものの、屋根もなく、殺風景であるため人が寄り付かず、デッドスペースと化している。その敷地の問題点を解消するために、私たちはこの広場に屋根を架け、ウッドデッキを敷いて、まるでカフェのオープンテラスのような憩いの空間を設けることに決めた。

次にこのプロジェクトを実行するにあたり、私たちは 6 月から 7 月までの間、デザインの決定のため毎週金曜日を活動日とし、グループでイメージのスケッチや模型を作成するなどして、私たちが目指す憩いの空間像を徐々に具体化させていった。それと同時に、専門知識をある程度習得している 3 年生でチームを構成し、構造面、材料面からの検討を行っていった。そして、50 万円という資金で、よりいいものをつくることを考えて、最近建築界でも注目の多い、ダンボールを構造材料とした屋根を架けることを決定した。7 月初旬の段階で、大まかなデザインと、使う材料、工法案が固まり、木材業者やダンボール業者に見積もりを依頼し、工場で発注できるサイズや、価格交渉を随時行った。しかし、実際の施工の作業を考えると、この段階のデザインには無理があり、私たちは人力で屋根を架けるために、施工方法を再度検討する必要があった。そこで生まれたのがユニット工法である。大きな屋根を人力であげるのは不可能に近いが、ユニット工法なら少しずつ屋根を上げることが可能なので負担が少ない。しかし、ユニットにすると屋根の架かる空間が少なくなってしまうという問題があり、それを解決するために、デザインを見直し、ユニットと工法でも、大きな屋根が架かっている空間を構成する案を完成させた。このように、憩いの空間づくりは、デザインというソフト面と、構造・材料というハードの面の両方から同時にアプローチすることで、お互いに発生する問題を解消しながら検討していった。

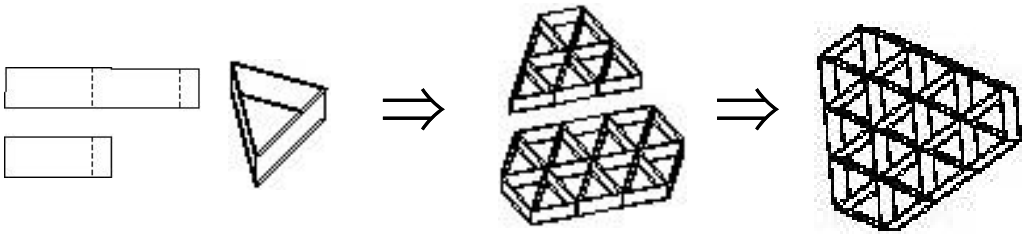
8 月から施工に入る前に、屋根の構造実験と、安全かどうかを確かめる、原寸モックアップを実際の敷地に施工し、十分な荷重実験とモックアップ実験を終えて、やっとデザインも決定した。そして、施工は屋外で測量を行い基礎を作るチームと、屋内で屋根を組み立てるチームとに別れ作業を進めていった。屋根の組み立てと、基礎・柱が立つと、屋根を構成員全員で足場を利用しながらひとつずつあげていく作業を行った。こうした作業で、1 日に 1 屋根上げるのが、私たちの施工のペースであった。施工の合間には、デッキの詳細のデザインを決め、デッキの段の高さを場所によって変えるなどの工夫をし、模型を作りながら検討していった。9 月に入ると、屋根はほぼ完成し、残るはデッキと家具のみであった。ここでもチームを、家具製作チームとデッキ製作チームの 2 チームに分かれ、同時進行で進めていった。そして 9 月 11 日に全工程が終了し、「和(なごみ)」前広場に、カフェテラス「ani hani」は完成した。

後期授業が始まり、売店和(なごみ)は、Y ショップとしてリニューアルし、そこを利用する学生が増えたと同時に、私たちのつくった「ani hani」も賑わいを見せていた。特に昼休みは、売店でお昼を買った学生であふれ、席が不足しているという状況にまで活気付いていた。そして私たちは、工学部周辺の学生を対象に、「ani hani」についてのアンケート調査を行い、使いやすさの評価や、デザインに関する評価などを調べ、私たちが実際に意図してつくった休憩所が、使い手側の視点から見てどのように評価されているかを知ることは、大きな経験となった。また、休憩所のメンテナンスも随時行い、台風などの災害に対しても、屋根だけを一時的に倉庫に保管したりするなどして、危機を免れた。こうして春期休業日の 2007 年 2 月まで、「ani hani」はその役目を果たした。

このプロジェクトを通して、私たちは、ものづくりのすばらしさを身をもって経験した。ものづくりは、決してひとりでは成し遂げることの出来ない、様々な役割の人が関わりあって、チームプレイで成り立っているのだと実感した。その過程は、多くの時間を費やし、困難なことも多々あったが、チームの皆が知恵を絞りあい、立ち向かうことで解決することが出来た。そして完成したときは、喜びと感動であふれ、それまでの苦労など吹き飛んでしまった。私たちはこのプロジェクトで、ものづくりのすばらしさだけではなく、仲間を尊重し、自分の仕事に一人ひとりが責任を持って挑むことの大事さを学んだ。

制作過程　屋根①

三角形ユニット　　**2分割ユニット**　　**完全ユニット**



2枚のダンボールの帯を折り曲げて、1つの三角形にする。

作業所の入り口の大きさから、ユニットを二分割したものを室内で作成。

ボンドが乾くのを待ち、二分割されたユニットを屋外で結合する。

「外国人留学生のための学生ツアーコンダクター実施予備調査」

代表　中島　隆弘

「外国人留学生のための学生ツアーコンダクター実施予備調査」は、２年前に結成したコミュニケーション研究サークルのメンバー有志で行っていました。

私たちは普段、コミュニケーション論の勉強、テーマ討論会などを行っています。内輪でのルールや行動規則を可能な限り設けず、ゆるやかな連帯からなる学内コミュニティを形成してきました。これは一見無秩序に思われるかもしれませんが、部活動をするには時間の制約があり参加できないものの何か活動をしたい学生、また内輪での細かいルールには抵抗を感じ、部活動に参加しない学生らにも参加の機会があることから、学部学年を超え、海外留学経験が複数回ある学生、都市研究員の経験を持つ学生など、個性的な人物を集める事に成功しています。

今回のプロジェクトは、サークルメンバーのうち、有志１０名で活動を行いました。

１、プロジェクトの目的

このプロジェクトの目的は、福岡を来訪された外国の方々に、より福岡を知ってもらう事です。至極当然のことで、他の方々によって既に行われている取り組みではありますが、以下のような問題が背景に存在しました。

１）活動背景①　留学生からの要望：日常の、日本・福岡を知らない短期の留学生達

この活動を始める以前、とある先生から「福岡を訪れる短期の留学生は、日常の日本の生活を知らない。観光バスに乗って、有名な観光地を回るだけである」という事を聞きました。交通機関・見学地共に、私達を含むごくありふれた日本人の生活空間ではなく、非日常的な福岡や日本、つまり観光地的な事のみを体験して日本での滞在を終えているということです。留学生の目的は、観光ではなく、現地の文化を学び体験することではないでしょうか。しかし多くの短期留学生にとって、その体験を実現するには、ホームスティ以外に方法が無い現状です。

そこで、同じ先生から「短期の留学生を連れてきた際に、普通の福岡を案内できる学生はいないのか」との相談を受けたのが、プロジェクトを始める直接のきっかけとなりました。これが、将来的に目指す「学生ツアーコンダクター」です。

このプロジェクトは、学生ツアーコンダクターになる以前に、留学生が何に疑問を持ち、何が見たいのか。また私達は、どこを案内し、何に気を遣えばよいのか。これらの予備調査と、その調査結果となる「留学生向きパンフレットの作成」を行うものです。このパンフレットは、ツアーコンダクターのテキストとなると同時に、留学生を含む外国からの来訪者が、自力で福

岡を散策する手助けとなることを目指しています。

２）活動背景②　学生からの要望：外国人を案内出来ない私達

メンバーの大半が海外の短期留学の経験を持ち、外国人の知り合いと何らかの交流があります。しかしメンバーの多くが、彼ら外国人を連れて福岡を案内できるかと言えば、残念ながらそうではないのです。

原因の一つは、福岡大学の学生と言えども出身地は県外で、福岡の事情をよく知らないということです。例として交通事情を挙げます。本調査中に起きた事ですが、取材帰りに天神から福岡大学までのバス乗り換えを誤り、南区へ行ってしまうという事件がありました。当人は国際交流会館に入寮し、外国人から福岡に関する質問を多く受ける身なのですが、福岡在住１年目。福岡を案内したい思いとは裏腹に、交通事情がわからないのです。

原因の二つめは、福岡の交通事情が複雑であることです。市内の移動には鉄道が無く、バスに頼らざるを得ない地区が多くあります。特に、百道浜や香椎浜の留学生会館、キャナルシティに行くにはバスでの移動が必須となります。しかし一方で「バスの乗り間違い」などは、福岡市内出身の方々にも経験があるのではないでしょうか。

これに対して本来案内の機能を持つべきであるはずの、バスの案内センターは朝９時前と夕方以降はクローズ。またバスドライバーも、あまりの路線の複雑さに「自分の担当地区以外は分からない」ということも多々あるそうです。これでは福岡を知ってもらう以前に、道に迷った挙げ句、見学時間が減ってしまい、案内者はおろか、福岡全体に対してマイナスイメージを抱かれてしまう恐れがあります。

原因の３つめは、地元の文化遺産等に対する無知です。博多祇園山笠や博多部のお寺街について知ってはいても、説明できるほどの知識がありません。また一般の観光雑誌では、スポットのお勧めは充実していても、背景まで説明がなされているとは限りません。

つまり、福岡での移動手段と、各案内スポットの背景を、案内者が知っている必要があると考えました。

３）活動背景③　社会からの要望：外国人が単独で動きにくい街、福岡

もちろん、単独で福岡市内を周遊する外国人の方々も存在し、福岡の街としても、地下鉄や100 円循環バスなどの交通機関利用者のためにハングル表記を行なったり、博物館・資料館などで日・英・中・韓４ヶ国語のパンフレットを準備するなど、ツアーではなく単独で市内を周遊する外国人に向けた取組みを行っています。しかしながら、その取組みも、未達成な部分が多く残されています。

例えば、外国人も多く利用する、福岡市内 100 円循環バスに乗務経験のあるバス運転士の方によると、両替機（各国で仕組みが違う）をめぐるトラブルや、外国語表記の不足からくるバ

ス乗り間違え（バスの行き先、バス停共に全て日本語で書かれている場合がある）など、よく発生するとのことです。

つまり、全体としては外国からの訪問者が戸惑わないような街づくりが進んでいるものの、個別のバス停などの細かい部分や、異なる交通機関間の乗り継ぎ、飲食店案内などの事業者ごとの枠、店ごとの枠を超えた総合的な案内については、取組みがなされていない状況です。

これらを、「外国人留学生が困っている事」という枠でくくり、その対策を私達学生が行う事により、事業者や広告主などの利害に左右されない利用者視点での案内が可能となるのです。

これらの理由から、ターゲットを「一定期間以上滞在する（数日間の滞在ではない）」「レジャー施設よりも文化や芸術に関心がある」外国人来訪者（これらの条件を満たすのは、主に留学生となります）に絞り、パンフレットの作成に入りました。

２、活動計画

１） 製作の流れ

各編の完成までの流れは、掲載項目の決定、取材、取材先のデータをもとに掲載する文章の作成、掲載写真の決定、決定した内容をもとにパソコンへの打ち込み作業、各編集内容の統一性の確認、修正、そして完成という流れでした。

２）掲載内容の選定について

住んでいる地域の歴史や慣習を知って欲しいという願いから、福岡の歴史・文化編、長期で留学してきた学生は、ホームシックにかかることもあるだろうと考え、そのための対処法を紹介したホームシック対策編、留学生が個人で活動できるための材料としての北九州編、日本製品や電気製品の購入場所を教えるショッピング編の４編のパンフレットを作成することを計画しました。各パンフレットには交通機関の利用の仕方と留学生のための情報機関の案内の折り込み記事も共通に入れるようにしました。

３、実際の活動

１） 留学生からのヒアリングによる内容変更

作成途中で、留学生の意見・要望を幾度も聞き、構成の変更を行いました。まず、パンフレットの形式に関して大きく見直しを行いました。３つ折りのパンフレットを４編も持っていては管理が難しく、持ち運ぶ際にも不便であること、４編とも持っている人は折り込み記事を４つ持つという無駄が発生すると考えました。そこで２つ折りにし、全ての編集記事を１冊にまとめるという形式に変更しました。次に、掲載する内容の見直しを行いました。福岡の歴史・文化編と北九州編は残し、留学生が日本人学生と同じように充実した大学生活を

送りたいという願いがあると聞き、詳しく留学生のニーズを調査して内容を変更しました。

２）パンフレットの目次　※箇条書き

次の内容を記載する事を最終的に決定しました。

① 留学生が一人で自由に福岡の街を歩けるように、地下鉄・市内バス・市外へ行くためのＪＲ・高速バスの乗り降りの仕方。

② 各主要大学のある地区と、天神・博多への行き方案内。

③ 留学生に役立つサイトと、交流機関、情報の入手場所の案内。

④ 福岡の歴史・文化を知るための第１歩として、是非訪れて欲しい博物館、庭園などの紹介。

⑤ 長期留学する学生が、日本でも少し遠方へ行く事になれて欲しいという願いから、門司港レトロや下関などの関門エリアの観光、産業施設の充実した八幡エリアの観光を掲載した北九州の紹介。

⑥ 日本人学生が行うように、新書でなく古本を購入するための古本屋の紹介や、各国の洋書が購入できる本屋の紹介。

⑦ 福岡ではなかなか運動する場が見つからないという意見から生まれたスポーツ施設の紹介。

⑧ 手軽に日本食を味わう事ができる。または、日頃は感じることのできない日本らしさを感じる事ができる場所の紹介。

⑨ 天神地区の地図、福岡市全体の地図、緊急連絡時の連絡の仕方

４、活動結果

１）パンフレット配布について

途中の幾度にも渡る形式の変更や編集内容の変更によって、作業が遅れましたが３月中に最終の校正を完了し、4 月以降に順次配布していきます。

なお課題であった英語標記については、ヒアリング等を実施した外国人留学生の協力を取り付けており、これから進めていく予定です。

２）今後の展開

製作中にお世話になった、西鉄の方や寮の留学生などから、「まだできないのか」との期待の声がありました。また、メンバーのパワーポイントの習得やイラスト技術取得に対して、取材したバス運転士から、個人的にではありますが「市内のバス路線図の英訳」について相談が寄せられています。外国人にもっと気軽に動いて欲しいというニーズが確実に存在し、私たちのパンフレットもそのニーズに答えており、さらに便利なものを作ってほしいという声がある

ことが分かりました。今後の課題としては、そういったニーズへの対応、つまり何を作ればよいのかという事を更に調査し、反映させていくことです。

５、感想と反省

１）様々な意見を頂き、右往左往しました

製作中・また報告会において、様々な視点や実体験に基づいたアドバイスを頂戴する事ができましたが、その頂いた意見を取拾選択しなければなりませんでした。中には「学生らしく」と「フォーマルに」、「観光は不要」と「レジャーの案内は必要」というような相対峙するご意見も頂き、そこを全て取り込もうとして、右往左往、果ては完成の３ヶ月延期という事態になってしまいました。

しかし、それらのご意見は「外国を訪問した際の不安」について、同じ不安を多くの方々が経験されており、工夫が必要であるという想いが、頂いたご意見の一つ一つの背景にあると私達は理解しています。

２）国際都市フクオカの曖昧さ

頂いた意見にはバラツキ、言い換えれば広範囲に渡ったご意見があります。それは、フクオカが観光のターゲットをどこに絞っているのか、都市の特徴をどうアピールするのかなどが明確になっておらず、「アジアの国からの距離的な近さ」以上に特徴が無いという状況を示しているのではないでしょうか。

例えば、京都であれば「歴史」。黒川であれば「温泉」「自然」というように、特定の都市資源・文化について非常に個性的であり、他には模倣ができません。これらの都市は、そのキーワードに基づいた観光開発や街づくりを進める事が可能となります。

パンフレットの作成を進めるうちに、有名だが、どのように紹介してよいのか、悪戦苦闘した場所が幾つもあります。北九州市内で言えばリバーウォークがその一つです。外国人が多く来訪し、ショッピングが楽しめる場所ではありますが、福岡市内のキャナルシティとどのように違うのでしょうか。北九州市観光協会において「みどころ」の一つとなっていますが、あまり北九州らしさを感じる事はできず、他の地域の施設でも代替が可能だと感じました。

これらの施設を掲載するか否かについては、メンバーの中でも意見が割れたところがあります。今回そのほとんどを掲載する事にしましたが、「福岡ならでは」、「日本らしさ」という点に欠ける場所で、福岡全体へどのような特徴を持たせることに寄与しているのか疑問が残ることから、果たして外国人留学生にとって行く価値があるのか、反省する点です。

パンフレットを作成する過程において、「福岡」とはどのような街であるのか。外国人に福岡をどのように伝えればよいのか。この一番単純な問いに私達が答えられない事を知りました。

この福岡のイメージ作りについて、施設の建設や整備という面から今の私たちは携わる事はできません。しかしながら、極ミクロな需要と人数であるけども、福岡を知りたいという思いが強い留学生の方々へ対しての広報については、私たちの活動が基となることができます。

福岡がどんな街であるのか、まだ私たちは明確な答えを持っていませんが、在学中を通して答えを探し出し、多くの方々に福岡を紹介できればと思っています。

留学生のための 学生ツアーコンダクター 予備調査

パンフレットの内容

歴史・文化編
- 歴史、年表
- 福岡の歴史
- Zoom up! 博多
- Zoom up! 大宰府

北九州編
- 産業・環境・歴史
- 小倉の観光・食事
- 門司港、下関
- アクセス

ホームシック編
- 心も体もリフレッシュ
- 自然で癒す
- 運動してみる

サポート編
- 交通機関を利用しよう
- Information guide
- 緊急事態
- 福岡 MAP

2006.12.08 (土) コミュニケーション研究サークル CI:

コミュニティ活性化のための地域通貨実現に向けた調査研究

長谷川宗典

①プロジェクトの背景

私たちは、これまでも「キャンパスツアー」や「収穫祭」といったイベントを学生と地域が一体となって実施し、開かれた大学にする活動の一端を担ってきました。今回の地域通貨ミナミナの流通実験は、こうした活動をより広げるとともに、イベントに留まらない恒常的な地域交流活動を模索していくツールとして、地域通貨がどの程度有効であるかを確認するためのものでした。

②当初の計画

試験運用の概要

町内の住人間で、地域通過を御礼とするサービス（お手伝い）のやり取りを行う。また、月に一度、地域通貨交流イベントを行う。

- 運用地域　　南片江５丁目
- 参加者　　南片江５丁目の住人
- 地域通貨の単位　　ミナミナ
- 地域通貨レート　　一時間以内で出来るお手伝い
- 流通期間
- 地域通貨の発行方法　　流通期間の開始前に南片江５丁目の各家庭に地域通貨各三枚と地域通貨の説明のパンフレットを配布する。
- 運用終了時　　配布した地域通貨はデータ収集のため回収する。
- 地域通貨交流イベントについて

  ⅰ参加してもらった人に、してもらいたい事、出来ること、を書いてもらう。

  ⅱその場で、してもらいたい事、出来ること、を交換してもらう。

  ⅲ参加者は、交換した相手と後日連絡を取り、地域通貨を使ったサービス（お手伝い）のやり取りを行う。

  ⅳサービス（お手伝いの）のお礼に地域通貨を相手に渡す。その際、裏面にサービス内容を記入する。

  ⅴ受け取った地域通貨は再利用できる。

③活動日程

- ６／１２　第一回町内会との話し合い
- ６／２３　第二回町内会との話し合い
- ７／１０　育成会との話し合い
- ８／２３　キャンパスツアー
- １０／１４　収穫祭
- １１／３　文化祭
- １２／１６　キャンパスコンサート

④活動内容

まず初めに、地域通貨の流通実験について、南片江５丁目の自治会の方と話し合いを持ちました。最初の話し合いの時に、一部の方から試験流通に対する反対意見が出ました。計画の反対意見としては、①現在うまくいっている、地域内の交流が地域通貨を導入することで、逆に悪化するのではないか？②地域通貨自体が流通しないのではないか？③地域通貨の概念がつかみにくい。④現金との互換性が無いので、逆に価値観を定めにくい。などがありました。このため、自治会の中でも反対賛成の二つにわかれてしまいました。一回目の話し合いでは結論が出なかったため、二回目の話し合いを持ちました。二回目の話し合いでも反対意見が根強く、特に①の地域通貨を導入することによって、逆に関係が悪化するのではないか？という意見が強く、流通実験を行うのは難しくなりました。なぜこのような結果になったかの反省点としては、事前に話し合っていた地域の方と連携が悪く、全体を説得するに至らなかった。また、地域内には暗黙の了解の様なものがあり、それを崩すような新しいツールの導入に対して抵抗があるのだという事を想定していなかったことにあると考えられます。

次に、地域全体では実験を行えないということなので、第二案として子ども会の子供たちの間で少し形を変えて実験が行えないか、育成会との話し合いを持ちました。話し合いの結果、最近は子ども会でもイベントに人を集めるのは大変であり、実験には協力できないとのことでした。このため、計画を大幅に変更せざる終えなくなりました。

そこで今年度の目標を、地域の方々に地域通貨のことを良く知ってもらい、更なる信頼関係を築くことにし、地域通貨の PR 活動を中心に行う事にしました。

キャンパスツアー（毎年やっているイベントで地域の小学生と保護者の方を、大学に招いて大学の施設を見学してもらう）の中で、地域通貨についての勉強会を行いました。これは、主に小学生に向けての内容でした。

毎年の恒例行事として地域の秋祭りである「収穫祭」に参加しています。今年度は祭の企画段階から参加し学生による出店やゲームコーナーの主催に加えて地域通貨の PR 活動も行いました。具体的には、地域通貨ミナミナのサンプルの配布や、地域通貨についてまとめたプリントの配布、今後のイベントの告知などです。

１２月には、ヘリオスホールでクリスマスイベントとして交響楽団有志によるコンサートと地域通貨を使用したゲームを地域の方とおこない、このイベントの目的としては、地域通貨「ミナミナ」の地域住民に対する PR。コミュニティネットのイベントで地域通貨が使える事を示し、通貨の価値の保障を図る。日ごろ交流の無い、地域の方と交響楽団員の交流を産むことです。

また、配布した地域通貨はこれから行うコミュニティネットのイベントの優待券にしていきます。そして、今後は地域が学生に支援を求める際の代価として還流させてもらうことによって流通の輪を広げていきたいと考えています。

⑤結果と感想

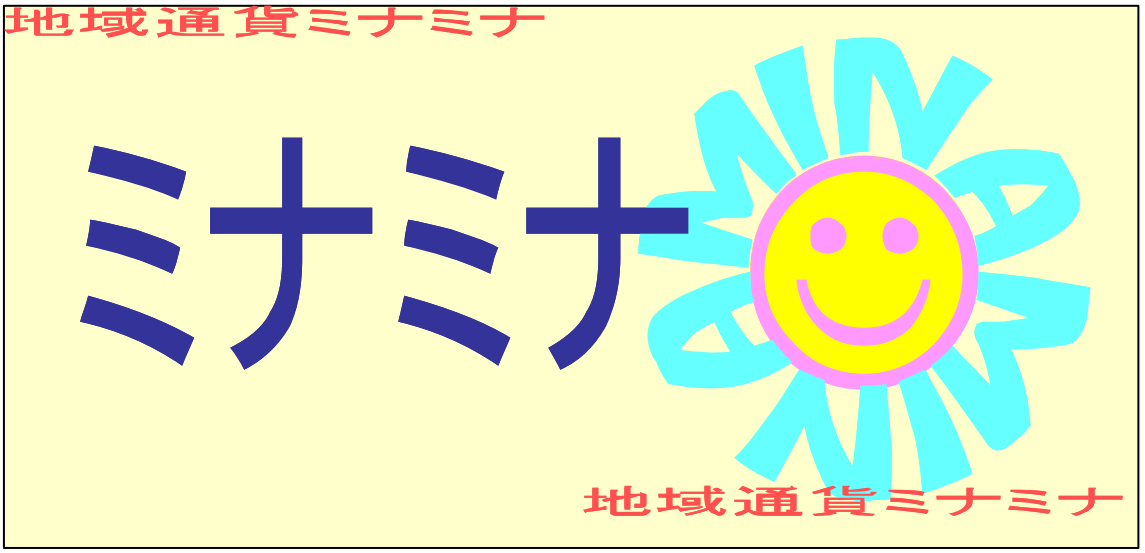
今年度の活動を通して、地域通貨についての地域住民の理解はかなり深まったのではないかと考えています。また、地域の方との交流の機会が増えたので、信頼関係がより深まったと思います。今後はこれらのことを生かして、地域通貨の発行に向けて活動を続けていく予定です。

反省点としては、最初の見込みが甘かったと考えています。前もってしっかり地域の方と話し合って、準備を進めておくべきでした。準備期間が短かったために、当初の計画を自治会の方に受け入れてもらえず、うまくいかなかったのだと思います。そして、地域に出て行って活動するには長い時間をかけて信頼関係を作り、良く話し合うことが重要だと感じています。

当初の計画通り進まなかったことは大変残念でした。しかし、活動を通して学んだことは多かったです。地域との繋がりを広げていく活動なので、時間をかけてじっくりと今後の活動に取り組んでいきたいと思います。

「ミナミナ」見本

（表）



（裏）

ミナミナは人と人とをつなぐ、コミュニケーション・ツールです。新たな交流を産む手助けになれば幸いです。

コミュニティネット理念

大学生である我々が、地域の活性化の機動力になるためには「大学のある町つくり」を行う事だと考えます。其のためには、「大学から地域へ」「地域から大学へ」そして「地域と地域」この交流の育成こそが大切であり、そのための活動を続けていきます。

コミュニティネット

キャンパスコンサート

■ 目的

地域住民にじかに地域通貨に触れてもらい理解を深めてもらうと共に、他の大学内サークルや他地域の住民との交流の場をつくる。

■ イベント詳細

日時：12月16日（土）

場所：福岡大学ヘリオスホール

演奏：福岡大学交響楽団有志

《当日の予定》

15:30～　開場

16:00～　開演

16:30～　地域通貨 PR

17:00～　懇談会

第２回(2006年度)
学生チェレンジプロジェクト報告書

福 岡 大 学 学 生 部
平成19年6月発行

Fukuoka University 1934